



# 上昇、下降期に分け ファンドの成績を分析

**ひ** とつのテーマが長続きすることではなく、相場は一本調子にはいかない。そうであれば、複数の相場を組み合わせて組成される投資信託も必ず、上昇、下落局面を経験する。もちろん、観測期間が長ければ長いほどより多くアッパダウンの波を経ている。

しかし、一般に投資信託のリターンに関するデータ（騰落率）は上昇期、下落期を含めて「過去3カ月」「3年」などと示されることが多い。

こうして算出されたデータだけを見るかぎり、当該ファンドのリターンが変動する癖を見いだすことは困難だ。

たとえばそのファンドが「上昇相場では市場平均をやや下回るパフォーマンスだったが、下落相場にはめっぽう強かつたため通期では好成績だった」とか、「上昇相場で市場平均を多少上回る成績を示したが、下落相場での下落率が極めて大きかったので通常での成績は悪かった」とい

つた傾向はつかめない。そこで、上昇期、下落期それぞれの動きを別々に観察すれば、そのファンドのリスクを知ることができるはずだ。

このような観点を応用するのに最も適したファンドといえればやはり日本株ファンドだと思われる。分析対象にしたのは国内株式一般型。2007年9月末現在で純資産額が500億円以上で、運用期間が3年以上の13本を調べた（表1）。13本のファンドの純資産額合計は1兆8855

①B 06年3~6月の「下落期」  
(同8.2%下落)  
②C 06年6~07年6月の「上昇期」  
(同11.8%上昇)  
③D 07年6~9月の「下落期」  
(同8.9%下落)

④E 06年3~6月の「下落期」  
(同8.2%下落)  
⑤F 06年6~07年6月の「上昇期」  
(同11.8%上昇)  
⑥G 07年6~9月の「下落期」  
(同8.9%下落)

## 右上に位置するほど優秀なファンド

図1：相場上昇期と下落期のパフォーマンス  
(05年3月~06年6月)

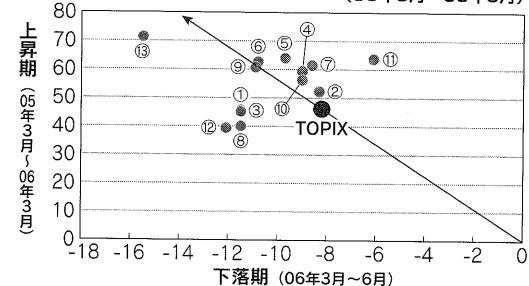


図2：相場上昇期と下落期のパフォーマンス  
(06年6月~07年9月)

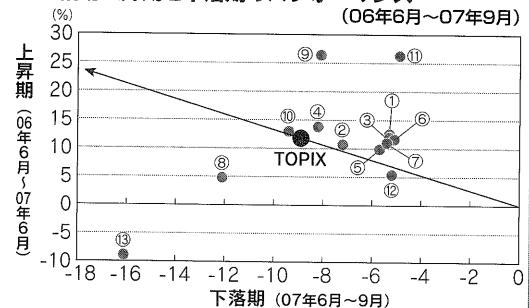


表1：純資産500億円以上の国内株式一般型ファンド(07年9月末)

ファンド名	会社名	当初設定日	純資産(億円)
① フィデリティ・日本成長株・ファンド	フィデリティ投信	98.4.1	4,336
② ノムラ日本株戦略ファンド	野村アセット	00.2.2	2,877
③ フィデリティ・ジャパン・オープン	フィデリティ投信	95.12.22	2,095
④ ノムラ・ジャパン・オープン	野村アセット	96.2.28	1,528
⑤ 日興ジャパン・オープン	日興アセット	98.8.28	1,268
⑥ 利益還元成長株・オープン	日興アセット	91.6.26	1,219
⑦ アクティイ・ニッポン	大和投信	98.11.20	1,059
⑧ 三菱UFJ日本株アクティイ・ファンド	三菱UFJ投信	00.10.31	945
⑨ トヨタグループ株式ファンド	トヨタアセット	03.11.14	925
⑩ ダイワ・バリュー株・オープン	大和投信	00.2.10	754
⑪ アクティイ・バリューオープン	T&Dアセット	96.2.29	658
⑫ デジタル情報通信革命	大和投信	99.9.1	617
⑬ 日興エボリューション	日興アセット	00.4.21	564

株・オープン」がそれ。さらに位置するファンドは、市場平均に対して基準価額のプレが小さかつたことを示す。

最も重要なポイントは、各点から直線に対して直角に引いた線の方向と長さ。右上方に向に最も長い線を引けるファンドが、リターンから判断するかぎり優秀なファンドだ。

図1では⑥の「アクティイ・バ

ンドが、リターンから判断す

ることにはやや無理がある。

しかし、こうしたデータもフ

ァンドの良し悪しを判断す

ることにはやや無理がある。

しかし、こうしたデータもフ

ァンドの良し悪しを判断す